

香蘭社（こうらんしゃ）の歴史

深川又四郎（ふかがわまたしろう）（生没年不詳）は磁器の生産を 1689 年に始め、家業の成長に合わせて、初代深川栄左衛門（えいざえもん）の名で知られるようになった。その子孫である八代深川栄左衛門（1832～1889）は、1870 年代末に 4 人の仲間と共に香蘭社を設立した。彼は日本初の磁器による電気絶縁体の製造に成功したことで、1870 年代前半にその名を既にどろかせていた。急速な近代化が進んでいたこの時代、産業用絶縁体を国内で生産できるようになることは、日本政府にとって重要な目標だった。栄左衛門の作った絶縁体は、東日本の横浜（よこはま）と西日本の長崎（ながさき）を結ぶ電線すべてに使われた。この絶縁体で得た利益は自らの窯で芸術的・創作的な作品を作るための資金に充てられた。

深川栄左衛門の窯元など有田にある窯元は 1873 年のウィーン万博に参加し、これが近代日本政府が参加した初めての国際展覧会となった。その 2 年後、日本が国内産業の近代化・西洋化を進める中、八代栄左衛門と 4 人の仲間は初代香蘭社（合本組織（がっぽんそしき）香蘭社）を設立した。彼らはその同じ年の末頃に宮内庁の御用達に任命され、翌年の 1876 年フィラデルフィア万博に見事出品。1878 年のパリ万博には八代栄左衛門自身も参加し、そこで香蘭社は金牌を受賞した。

1879 年、初代香蘭社は、現在の株式会社香蘭社の前身である香蘭社（香蘭社合名会社（こうらんしゃごうめいがいしゃ））として新たなスタートを切り、九州最初の近代法人となった。電気絶縁体、磁器美術品、ファインセラミックの 3 つが中核事業部となっている。